

も残っているので見ることができません。石柱の道標
大師道は、取手や我孫子、柏でも確認できます。

震災の翌日のゆめみ野駅の周りは一見したところ、
地震の影響による景観はなにも変わった様子が見う
けられなかったのですが。山の坊の札所に行くと、
いつもと違う景色が目にはいりました。

山の坊には、相馬霊場札所の他に、近年復興した
熊野神社と集会所を兼ねた阿弥陀堂(集会場の中に
祀られている)、そして、海老原医院と隣接してレン
ガの煙突が聳える屋敷があります。レンガで造られ
た煙突は、明治時代から続く醤油の製造所であつた
証でした。

醤油工場であつた、レンガの煙突は上部のレンガ
が崩れ鉄骨が剥き出しになっていました。熊野神社
は平成になってから再建された村社なので、建物に



取手では見掛けなくなってしまった、わら葺き屋根
の民家が残っています。

被害はないものの社殿前の石柱は悉く倒壊していま
した。8頁に写真掲載。

流山には万丈味噌という味噌工場があります。

また、天明二年創業の天晴(あっぱれ)という、小林
一茶の俳句仲間の双樹(そうじゅ)が経営していた味
醃(みりん)もあり、お互いに繁盛していた様です。

現在、秋元酒造では味噌の生産は行われていない。
流山市での話で、亀甲萬醤油(キッコーマン)という
会社は、利根川沿いにあつた醤油を製造していた大
店を悉く自社の配下に統合、或いは競合により廃業
にしたという。そういえば、守谷の高野にも似たよ
うな煙突の建つ会田醤油がありました。

山之房西蓮寺(廃寺) 天台宗

ご本尊、阿弥陀如来、

脇侍、勢至菩薩と観音菩薩の阿弥陀三尊立像
常総線踏切先の取手守谷道五又路角に「藤(とう)か
ら地蔵」があります、石造の地蔵像の背後には藤の
枝が絡みついていたらと市史にある。熊野神明神社か
ら一直線上にあるこのお地蔵様は、まるで参道の六
地藏の様である。地元の口伝(こうでん)、口伝えの伝
承)によると、大きな山門もあつたという。

天正時代(1573 ~ 1591) 北条氏政と常陸の佐竹氏
との合戦時に常陸勢に焼かれたとの口伝が残る。

熊野神明神社、

明治の寺社合祀令により、野々井の白山神社に合
祀されましたが、平成十六年に村人により熊野神社
を復活することができました。

熊野〓浄土(仏教の天国) 八咫鳥(やたがらす)で

有名な熊野三山の熊野社と、神明神社〓神明社とは
総本社が日本一有名な伊勢神宮(内宮)。太陽女神「天
照大神(あまてらすおおみかみ)」をまつる社で、「お伊
勢さま」の呼び名で各地域に親しまれています。

新四国相馬霊場七十八番札所と大師道

熊野神明神社の境内(けいだい)には、四国八十八霊
場讃岐国仏光山郷照寺(こうしょうじ)の第78番札所
の写しがあります。

相馬霊場は、安永四年に取手の大鹿山長禅寺の観
覚光音禅師(かながくこうおんぜんじ)によって、取手が
下総国相馬郡(しもうさのくに そうまこうり)と言われ
た頃に、取手の利根川沿い、我孫子、布施(現柏市)
に地元民の賛同と支援のもとに開基創建されました。
取手西部の相馬霊場は、戸頭薬師堂札所、米ノ井
龍禅寺と

- 三仏堂、下
- 高井高源
- 寺49番50
- 番、高井城
- 址妙見社
- 52番から
- (現)霞ス
- トアー横
- の道を下
- り、ゆめみ
- 野2丁目
- 下の相野
- 谷川の暗



山の坊の大師道

渠の始まり部の林中の坂を上がる「大師道」で78番札所、藤から地蔵の六叉路から野々井白山神社62番へとお遍路(へんろ)していました。大師道とは、相馬霊場のお遍路道順を案内する石柱の道標が路地毎に建てられたもので現存します。四国の霊場では「お遍路みち」といわれています。

大師霊場は真言宗高野山の弘法大師の修行場である四国四県に広がる空海の修行場でした。

従って仏教の聖地なのですが、昔から神仏習合が常識であり、宮社と寺は一体でした。よって八十八霊場の大師仏像が社(神社)や宮(神宮)境内にあっても「変」ではありません。

【注釈】、原則として、宮号や神宮号を除く全ての神社を「〓神社」と称するようになったのは明治になってからです。明治以前は〇〇社、〇〇宮、〇〇天神などと呼ばれお寺と一体でした。

しかし最近では神宮までも神社と呼んでいます。

郷州街道、

相馬氏によって守谷城(郷州原(みずきの住宅))高井城(下高井)大日山、岡の山城をつなぐ軍用通信連絡道として作られたと思われまます。

後に、手賀海の乾燥陸地化により、銚子道と呼ばれ成田街道に接続されました。昭和52年郷州原遺跡が発掘され縄文土器や住居が出土されています。

文化11年(811)、高田与清は「相馬日記」の中で淡海に浮かぶ美しい島と郷州原の美観を記しています。江戸時代は誰の支配に属せず無主無住の免訴の地でした。現在、守谷の野鳥の森の木道の様な。

ゆめみ野4丁目の庚申塚(こうしんづか)

現在地の庚申塚には庚申塔が四基程建立されていますが、内二体は古くから存在していた石塔です、但し場所が百メートル程西の場所から移動されています。

現在、あづま幼稚園の道向かい側に古い集合住宅が建って居ますが、この住宅前の道には、高井小学校へ行く道が左(沼方向)へ、現在の道(岡台地方)から分岐する「二股路」の東側角にありました。

昭和50年代頃に、庚申塔が全て朱色に塗られた様子を見受けたため、当時は「庚申を行う人達が居る」と確信していました。その後、朱色の庚申塔は色が失せ再び見ることはありませんでした。しかし後に、庚申塔が新造された様で真新しい庚申塔を確認できます。

石造青面金剛像

三猿の土台に青面金剛立像が庚申塔です。

庚申待 二世安楽 寺田村(大山)同行八人

享保十一年(1726) 奉供養 十一月吉日

石板庚申処 奉待庚申供養所 寛延二年(1749)

庚申待ち、庚申祭とは

庚申待は中国の民俗宗教である道教の伝説に基づくもので、庚申待とは「庚申祭」がなまった、といわれています。主に男性がその行事に当たりました。

人間の頭と腹と足には三戸(さんし)の虫、彭侯子(上人)と彭常子(中戸)と命兒子(下戸)がいて、いつもその人の悪事を監視しているという。

三戸の虫は庚申の日の夜の寝ている間に天に登って天帝である「閻魔王」に日頃の行いを報告し、罪状によって寿命が縮められたり、その人の死後に地獄、

餓鬼、畜生の三悪道に墮とされると言われていた。

そこで、三戸の虫が天に登れないようにするため、この夜は村中の人達が集まって神々を祀り、その後、囲炉裏を囲んで寝ずに酒盛りなどをして夜を明かしました。是が庚申待です。60日に1回は庚申(かのえさる)の日が巡ってくるので、場所によっては6回〜7回行うところもあります。また「庚申様」は月のモノや出産の汚れを嫌うというので、女性は主に飯の準備や片付けが役目でしたが、近年は一緒に参加となりました庚申待を三年十八回続けた記念に建立されたのが庚申塔で、今も各地に残っています。

日本には古くから伝わっていたものと考えられており、平安時代から行われ、当初は公家や僧侶がやっていて、すぐろくや詩歌管弦を楽しんでいた様で『枕草子』にも庚申待の話が登場しています。

江戸時代から民間にも広がり、庚申信仰は今では廃れたが、親睦会などに名前を変えて今でも庚申待を行っている地方があるそうです。

庚申待は徹夜で過ごさなくてはならないため、眠らないように、顔にスミを塗ったり、胡椒をかけたたり、太鼓を叩いたりしたといえます。また籠城中の兵士達も庚申待を行っており、カフェインが入っている茶を飲んで眠らないようにしたそうです。 Wikipedia

高井小学校と「くじばさま」

高井小学校のルーツは、ゆめみ野3丁目の守谷より下高井境変形十字路の郷州街道沿いの低地にあります。市の旧跡案内柱が道端に設置されています。

新取手1〜2丁目の学童の通学路は坂の多い道を毎

日徒歩で通学する宿命でしたが、最近(2000年)は東幼稚園前の急坂を使わず、少し遠回りだが新取手5丁目経由で楽になったようです。

ゆめみ野公園角の交差点には、通学路にも関わらず「くじの神」が祀られています。通学路なのに。

願主本誉休圓(ほんよきゆうえん)造立年不明。

巾着帽やちゃんちゃんこを着せられ、ジュースなどが備えられ絶えることがありません。

「下高井には鬮ば様ってえのあんだよな。地藏様になつてるがね。ちゃんと榊上げてんの。」

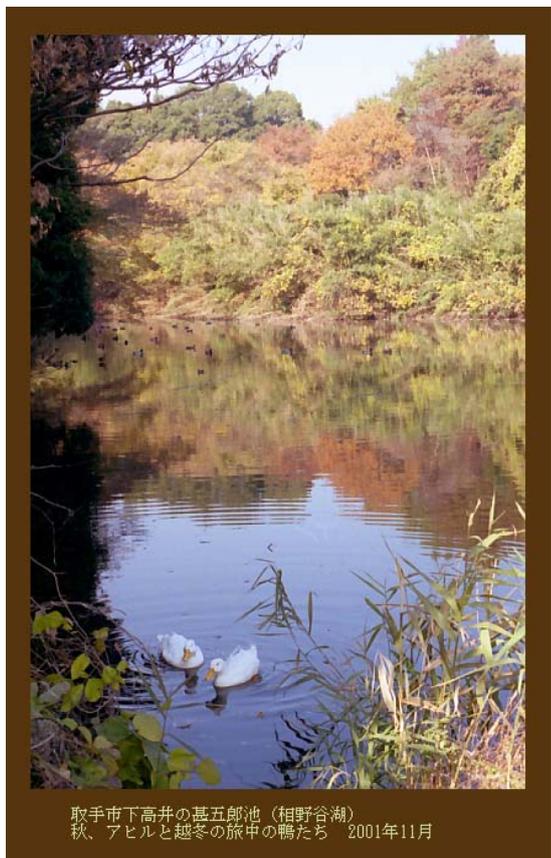
石像は鬮(くじ)の神様で、ここでは鬮引いて、交替に当てる訳なんです。そこで鬮当たるように、て、地藏様へ赤い布下げてきたんだよな。今でも上げてるわ。講なんかで当たるようになって、それに引つ掛けた訳なんだよな」 取手市史民族編Ⅱより

このくじば様には、賭博打ちもお参りに来たと言ってます。昭和56〜57年間の聞き取り文。

取手の歴史には、浅草辺りにまで知られる闇賭場の開帳が昭和50年ころまで開かれていました。

湯舟での賭場開帳の様子は、土浦の開業医であった佐賀純一の著書「浅草博徒一代、アウトローが見た日本の闇」で紹介されました。世界中に出版された実話小説ですが、ノーベル賞受賞者の米田シンガールのボブダイランの倒錯問題でも話題となりました。

関東鉄道貨車内での闇賭博事件、昭和50年の事件で



取手市下高井の甚五郎池(相野谷湖) 秋、アヒルと越冬の旅中の鴨たち 2001年11月

す。この開帳を最後に、賭場の騒ぎはなくなりました。

江戸湯島の菅原道真公を祀った、合格祈願の湯島天神も、江戸徳川幕府公認の宝くじ抽選場でもあり、質問と富くじは切っても切れない因縁が存在している様です。

相野谷川と暗渠 あんきよ

ゆめみ野2丁目と1丁目の境に米ノ井の谷津を流れる相野谷川は山の坊低地で橋を潜り暗渠へと流れ込んでいます。ゼンリンの地図では、暗渠はゆめみ野2丁目セブンイレブン地下でゆめみ野4丁目へ向きを変えて、ゆめみ野公園の鴨の住む池へ向かっています。

池からは高井小学校校庭の南端にあるポンプ小屋へ更に、ふれあいの里老人ホームからの下水道と合流して、地表の相野谷川へと繋がります。

相野谷川は国土省が認める一級河川ですが、正確には、県道295取手矢田部線から利根川河口までが一級河川であり、その上流の新取手、ゆめみ野、下高井の水

砂(みずすな)迄の区間は、取手市の管轄になっています。水砂は湿田であったそうですが、水源はさらに奥であると、地域の民生員より聞いています。

何度か大雨のたびに訪れた結果、水源は、国道294号戸頭消防署の辺りではないかと思われまます。降水量が高い大雨が降ると、常総線の稲戸井駅先の踏切を渡り、糠塚(ぬかつか)古墳の脇を流れる大量の雨水流を見ることもできます。

甚五郎沼

相野谷川枝流、ふれあいの里老人ホームの敷地内にあった自然湖、甚五郎沼は湧き水による湖沼でした。

団地造成時に埋め立てられ、甚五郎遺跡とともに消え去りました。

沼の周りは、野鳥しか近づけない高低差の高い山林の中で相野谷川に面した老人ホーム側だけが平地でした。鴨が冬場だけ訪れていた大変静かな、そして湧き水の美しい湖面は神秘的な景色を見せてくれました。

越冬鴨は相野谷川に住家を変えて、今でも来てくれます。近頃はアオサギを見かけることがあります。

ゆめみ野5丁目東の「鏡が出土した大山1遺跡」

大山遺跡は取手市の台地中央の水源とする相野谷川右岸台地の北側斜面に形成された4世紀頃の古墳時代前期の集落です。平成8年〜12年に茨城県財団が発掘調査を行い、住居跡25件、竪穴遺構3基を検出しました。平成12年の発掘調査で第37号住宅跡から重圏文鏡と呼ばれる青銅鏡が出土しました。

住居跡は5.5×4.4mの長方形で中央に炉をも

ち、他の住居跡と同様の規模や形態で特別な点はありません、

鏡の出土状況も無造作に廃棄された様であったとされています。

写真奥の白い建物が高井小学校になります。

出土鏡はやや粗製の直径7.5cmの小型鏡で背面の文様は同心円文に単純な斜線文を加えた四重同心円状文様で、古式の国産鏡といわれるもの、全体に錆び著しく、一番外側に櫛歯文帯がありました。郷土出版社

道の右側の発掘調査所で山林が伐採されている写真です。ゆめみ野4丁目21番地になります。高井小学校の通学路でした。神社はありません。

ゆめみ野は遺跡だらけ

平成23年(2021)街開きとなり姿を変えて、それまでの森と林は住宅地と変わりました。

区画整理の実施以前に実施された遺跡発掘調査は

原始古代の歴史の解明に貴重なものとなりました。

ゆめみ野1丁目駅北側一帯の柏原遺跡は、旧石器

と弥生の両時代の遺跡。ゆめみ野5丁目を中心とした大山遺跡、この遺跡からは古墳時代の銅鏡。ゆめみ野3丁目の下高井向原遺跡では平安時代の瑞花双鳳五花鏡という珍しい資料が出土しています。

弥生時代の竪穴住居の痕跡出土、東原遺跡

ゆめみ野公園調整池、旧地名 野の井東原 517

1996年発掘調査時に黒曜石(くろようせき)の槍先の有舌尖頭器(ゆうぜつせんとうき)が出土、栃木県矢板市の高原山産と判明、縄文時代草創期の狩場として土地利用されていた様子が伺われる。

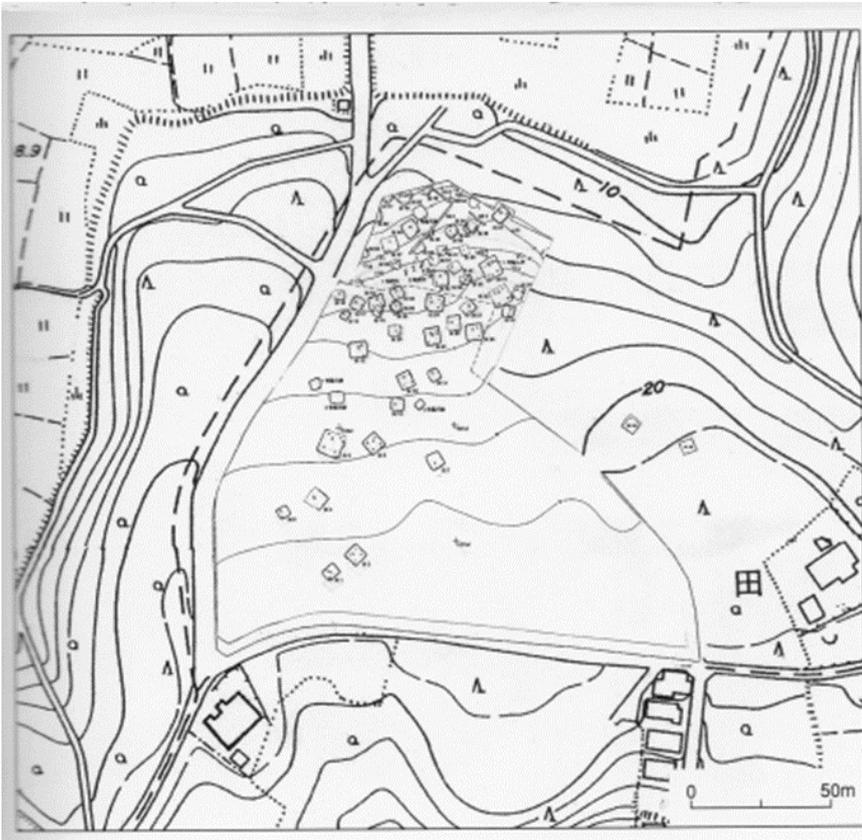
甚五郎崎遺跡

甚五郎崎遺跡は、ゆめみ野3丁目の高井小学校の東側台地(現在伊藤ハムの敷地内)に出土されました。平成6年(1994)にゆめみ野地区の区画整理事業の事前発掘調査で発掘されました。

発掘調査結果により、甚五郎崎遺跡は縄文時代早

大山遺跡全景(茨城県財団教育提供 相野谷川を北に見下ろす台地上に古墳時代前期の集落が存在した。)

大山遺跡遺構分布図(「大山I遺跡」より転載加筆) 集落は台地の北側の緩い斜面中段に集中して遺構が存在した。



◆上の地図と写真の関係

地図の下部に二股路が記されています。

建物が建っているが、現在のあづま幼稚園の向かい側に建つ四階の集合住宅ビルです、同位置から撮影した写真が「2007年大山庚申坂」です。

期から前期と平安時代には集落として、中世から近世には基域として利用されていたようです。また、出土品が伴わず、時期が判別できませんが、床を握り込む堅穴にはせず、柱だけを掘り込んだ掘立柱建物跡が9棟あったことが確認されています。

平安時代の堅穴建物跡は、集落と言えるかは難しいところで、遺跡全体で3軒しか出土していない、9世紀後半の堅穴建物跡です。その内の2軒は遺跡の中央寄りに約20mの距離と近接して作られており、6点の墨書土器が出土しています。

甚五郎碓遺跡ではほかに墨書土器が出土し、合計7点の墨書土器が出土しましたが、これは、市内で最多の出土例となります。墨書土器は神仏に關係する文字や地名、人名などが記載されることが多いですが、ここから出土した墨書土器は、集落を意味すると思われる「庄」が2点、「袋」が2点のほか「山本」「三」の文字が書かれています。

現在、それらの文字を連想させる地名は残っており、どのような意味があつてこのような文字書かれたのか知る手がかりはありません。また、近接する建物跡の1軒からは『得』と書かれた墨書土器が出土しています。「得」は仏教に關連することが多く、また土器に文字を記したのが仏教者だったと言われることから、甚五郎崎遺跡は、仏教者が活動していた可能性ががあります。時期を確定できる資料が伴わなかったため、利用時期が不明な掘立柱建物跡が、もし墨書土器と同じ平安時代のものであったと想定するならば、当時、寺院や役所などが掘立柱建築で作られていたため、寺院に關係する建物だった

可能性もあるのではないのでしょうか、甚五郎崎遺跡は平安時代には市内西部の中心な場所だったのかも知れません。

上高井糖塚古墳

稲戸井駅から北東500m程の位置に前方後円墳と円墳が現存している、6世紀後半築造。

下高井向原遺跡

2丁目1〜4と3丁目4にかけて発掘、土坑墓出土し副葬品の花鏡と刀子が埋葬されていた。いずれも12世紀頃の日本製、この頃は千葉氏により相馬御厨(みくりや)が出来て伊勢神宮に寄進された頃になります。

埋葬された死者は御厨と關係があつたのかは不明。端花双鳳五花鏡について、鎌倉時代の青銅製の鏡で端花双鳳(ずいかそうほう)という大陸風の文様(もんよう)で作られていたが、花卉が5枚という和洋のデザインが入った日本独特の和鏡に進化し銅鏡という意味でも大変貴重なものであります。

役所などの主要な施設が取手に見つかっていないため、現在のところ、なぜこのように重要で価値の高い遺品が出土されたのか、時代背景としては、相馬地域が千葉氏によって伊勢神宮に寄進されて相馬御厨(みくりや)が成立した時期になります。出土品との關係は不明です。

將門の井戸

大山遺跡の地に城山という所があつた。伊右衛門どんに古い井戸あつて、將門のおふくろ

が使つてたらしい。それ代々埋めてはならねえつて事になつてる。昔、大山では「胡瓜の輪切りは喰わない、門松は飾らない」等、神田明神と共通する風習がありました。

出土品



右の鏡：端花双鳳五花鏡、下高井向原遺跡

ゆめみ野3丁目の霞ストアーと2丁目の間。

墨書土器「西」、新屋敷遺跡、野々井墨書土器「袋」、甚五郎遺跡、高井小裏

2021/04/21 記

新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会資料



関東鉄道常総線のあまり知られていない史実 創業時の起点は下館(上り)、

明治44年(1911)、常総鉄道線の敷設に際し「下館→水海道→佐貫(龍ヶ崎線の延長)の計画案と「下館→水海道→取手」の計画案がほぼ同時期に申請され、両者の話し合いの結果、佐貫計画案の事業者が申請を取り下げたため現在の路線が建設された。

開通当初、茨城県内では、明治22年開通の水戸線が幹線で東北線小山が起点駅だった為、常総線はおのずと下館が起点となった。もう一つ明確な理由ではないのですが、大正2年11月常総鉄道開通に熱心な投資家が下館方に多かった為と聞く。だが、国鉄乗入れが始まると国鉄に合わせざる得なくなった。

国鉄常磐線は、起点が田端駅から上野駅となり、常磐線利用者には知られていた「日暮里の悲鳴」という、日暮里駅と三河島駅間の急カーブでの車輪とレールが発する「キーン」という摩擦音とともに、常磐線の起点駅となって現在に至っています。

常総鉄道の発起人は日本歴代首相を務めた吉田茂の実父

明治44年に、日本歴代首相を務めた吉田茂の実父である竹内綱(つな)を代表として発起し、翌年の明治45年に常総鉄道株式会社を設立しました。

吉田茂は五男で実業家吉田健三へ養子に出している為に吉田(吉が吉)と変わりました。

竹内綱は、朝鮮鉄道事業の統合を実現したことで知られています。前島密(ひそか)、1円切手、郵便や鉄道事業に貢献)と同年です。

国鉄乗入通勤列車下妻発取手經由上野行

昭和23年2月1日改正のダイヤで設定された乗入列車は、下館を4時5分に発車し、取手で土浦発6時16分の常磐線に併結され、上野に8時25分に到着した。一方、下り列車は、上野16時40分発に併結された客車が取手で分割され、下館に20時39分に到着するのを日課としていました。

しかし、折角できた直通も、上野駅発着の時刻が通勤時間帯と上野着は遅く、上野発は早いと食い違いため、昭和23年5月1日に改正して、常総線内の始発終着駅ともに下館から下妻として、上野着発の時刻も改められ、改正後は、上野駅着7時45分、発が17時20分に変更されました。

客車は、常磐線はオハ35等6両、常総線は2000ロングシート車両でしたが、後に常磐線はディーゼル車キハ17、常総線はキハ50に置き換えられました。さらに、国鉄乗入併結運行のために、連結器の床面高さが異なるため、改良した様です。

戦時中に失った車両により、省社(鉄道省)の車両不足による満員乗車の緩和対策として、私鉄の乗入を促進、省社側からの陳情によるものでした。

常総線もピンチヒッターとしてその役割を翌年の松戸→上野電化まで、無事果たしたことになります。

昭和24年6月1日より国鉄は電化により、常磐線に省電の運用が開始されます。

省電(しょうでん)＝省線電車、日本国有鉄道(国鉄)の電車で、大都市周辺で運転された近距離専用電車または近距離専用電車線をいきました。山の手線、京浜東北線、中央快速線、総

武緩行線、常磐快速線を省電と言った。

鉄道ピクトリアル より

下館発取手行の豪華特急列車「しもだて」

昭和14年頃(戦前)下館発一番列車により、通過駅運行がされていたが、昭和25年(戦後)11月のダイヤから駅通過運転が増えました。下館→水海道から取手間は通過→取手間1時間半、更に、昭和32年7月1日、下館→黒子→下妻→取手間2駅停車の特急「しもだて」が1時間で運行、新聞折込チラシやマツチ箱ラベル宣伝と車内では湯茶、タバコの接待、車内でラジオ放送のサービスと社の力の入れ方は異常ともとれた様です。

さらに、同年11月から6駅停車の「鬼怒風」が運行された。これ等の列車名は、懸賞付き募集で決められたそうです。

昭和50年、取手駅貨物車内賭博摘発事件、

10月28日、走行中の混合列車内の貨車を占拠して移動賭博場を開き、常習賭博を行っていたヤミ米ブローカーら35人が検挙されました。以後、取手に於ける賭博は聞かなくなりました。

非電化で複線運用は珍しい。

日本住宅公団などから資金分担を得て、全線単線であった路線のうち取手→水海道間を1980年代までに複線化している。その結果、非電化私鉄でありながら、1000系に及ぶ複線区間が存在する全国的に見ても珍しい路線となっています。



下写真
山の坊の
長屋門
地図中の
丸数字は、
相馬霊場の
札所番号です

東日本大震災の発生翌日、山の坊のレンガ煙突一部倒壊

